
バルザックの作品生成における循環的ダイナミズム

——『セザール・ピロトー』を中心に——

鎌田 隆行

〈名古屋大学〉

Résumé

Par son extravagante multiplicité et ses différenciations permanentes, la genèse de l'œuvre de Balzac a ceci de particulier qu'elle englobe d'innombrables effets et réactions esthétiques en circulation constante entre le pôle créateur et l'instance réceptrice. Ainsi l'analyse du dossier génétique de *César Birotteau* (1837) montre d'une part que, sur le plan global de la réalisation du projet de roman, les actes de programmation, d'émission et de réception entretiennent des rapports interactifs. Et d'autre part qu'au niveau de la composition de l'œuvre les efforts de textualisation et les travaux de relecture se stimulent sans cesse chez l'écrivain, ceci selon un processus de création qu'il a stratégiquement optimisé. La force dynamique de la genèse de son œuvre s'appuie de la sorte sur un mouvement constant de va-et-vient entre émission et réception, entre écriture et lecture, ce qui lui permet d'exploiter à fond le potentiel d'interprétation et de réinterprétation du texte romanesque.

バルザックの作品生成過程は、起源が異なり、時期や持続時間が極めて多様な無数の制作の挙措から成り立っている。というのも彼においては、個々の小説はそれ自体で完結するものではなく、総体的な一つの全体たる作品を目指して常に他のテキスト、他の計画に向かって開かれているからだ。

実際、この小説家の主要な活動期間については、創造空間の中に三つの次元——それらは互いに錯綜した関係にあるのだが——の構築作業が認められる。プログラム化、具体化、制作である。

- 1) テキストの総体の大枠でのプログラム化。バルザックが小説の序文や書簡、創作メモで練り上げ、『人間喜劇』の「総序」で述べた「科学的」意図によれば、三つの「階層」（『風俗研究』、『哲学研究』、『分析的研究』）に分節されるべきものとなる。
- 2) 作品や連作の出版・再版の具体的計画。これは出版状況に大幅に左右される。
- 3) 各作品の執筆。事前の計画に従わず、内容の大きな変容を招来することが少なくない。

これらに属する全ての資料を一望のもとに収めることは不可能であるが、ステファンヌ・ヴァッションによって作成された、バルザックにおける作品の計画と刊行のマクロレベルでの動きを明らかにした総合的クロノロジーの決定的な貢献についてはいくら強調してもし過ぎることはなからう¹。だがそれでもなお、複数のコーパスの様々な部分を横断する形で細かな制作の挙措と小説世界の極めて大胆な構造化と修正とを時に意表をつく形で結び付けている、多数の関係の網を解明するという課題が残されているのである。

こうした複雑なバルザックの作品生成のダイナミズムの要諦を理解するには、解釈という問題を再考する

1 Stéphane Vachon, *Les Travaux et les jours d'Honoré de Balzac*, Presses Universitaires de Vincennes / Presses du CNRS / Presses de l'Université de Montréal, 1992. バルザックの作品生成資料の分類については次の文献を参照のこと：S. Vachon, « Les enseignements des manuscrits d'Honoré de Balzac. De la variation contre la variante », *Genesis* 11, 1997, pp. 61–80.

ことが有効であるように思われる。なぜなら、すぐれて開かれたプロセスであるバルザックの創造行為は、読者における、また作者自身における受容と読解の効果をたえず招来し、それが今度は創作者に作品の新たな可視性を開示し、作品の強度を高める書き直しへとつながっていくからだ。例えば読者の受容を先取りする出版戦略は作家の現行の、あるいは以後の作品計画の方向性を少なくとも部分的には変えうるのではないだろうか？あるいはまた、一作品の創造の次元では、自身のテキストの読解と再読の行為が生成プロセスを刺激する活力源となっているのではないだろうか？

解釈と再解釈のこのような創造的作業を捉えていくために、以下では様々なレベルで示唆的な生成の痕跡を残す『セザール・ピロトー』(1837年)²の生成資料を検証していこう。この試論は小説内の挿話の形成や意味作用の強化の過程を逐一追うことよりも、マクロとミクロのレベルにおけるバルザックのエクリチュールの機能の主要な特徴を明らかにすることを旨とするものである。

プログラム化と出版戦略

『セザール・ピロトー』は1838年という年号付きで1837年12月にブレより出版された。正式な題名が示す通り、物語は主人公の破産の挿話を中心として、このパリの香水商の栄華の日々、不幸、名誉回復を順次語っていく。以後のバルザックの世界の常連となる多くの人物たち、即ち商人、銀行家、高利貸し、公証人、司法官を登場させているこの小説は我々に新興資本主義の舞台裏をのぞかせてくれる。

プレイヤード版でルネ・ギーズが提示している関連資料の年代確定を参照しつつ、まず作品のプログラム化と出版戦略の大筋を整理していこう³。

この小説の計画は1833年秋に最初に姿を現している。単に『セザール・ピロトー』とだけ題され、哲学的作品として予告されたこの作品の序盤部分は、翌年には長い題名を伴って草稿でテキスト化されている。商業社会の描写、破産する主人公の波乱の生涯を中心とした筋立て（作者をして早々に章題のリストの作成を可能ならしめた、明確なプログラム性を持つ題名——栄光と凋落——がそれを示している）、ピロトー神父とこの登場人物の関連づけといったことが、タイトルページと執筆された30枚の草稿からうかがえる物語の主要な要素である⁴。他方、バルザックの統括のもとにフェリックス・ダヴァンによって書かれた1834年12月の『哲学研究』序文では「実直な商人、周囲の敬意を必要とする商人の完璧な典型である『セザール・ピロトー』は、「実直」という思考によってピストルで撃たれたかのように突如として死を迎える」⁵となっている。

この時点まで計画は当時のバルザックの作品と出版計画が形成していたテーマ的、またカテゴリー的布置に従って進展しているといえよう。実際、『栄光と不幸』⁶——二つの作品の題名は共鳴し合う——で既に描かれていた商人の生活はここでは『トゥールの司祭』⁷の主人公の弟によって体現され、破産といういっそう仮借のない主題と出会い、また哲学的射程をも持つことになっていたのである。哲学的作品という帰属先は一時的なものであることが後に明らかになるのであるが、それでもバルザックにおいてこのカテゴリーは

2 この小説の正式な題名は『香水商、パリ第二区助役、レジオン・ドヌール佩用等々のセザール・ピロトーの栄光と凋落の物語』であるが、慣例に従って短縮する。作品の主要な生成資料はフランス学士院図書館ロヴァンジュール文庫に収蔵されている。

3 Balzac, *La Comédie humaine*, nouvelle édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976–1981, 12 vol. (以下 *Pl.* と略), t. VI, « Histoire du texte », pp. 1119–1132. « Notes et variantes » においては生成資料の分類について詳細な記述が行われている。

4 « Histoire du texte », *Pl.*, t. VI, pp. 1119–1123.

5 *Pl.*, t. X, p. 1214.

6 後に『鞠打つ猫の店』となる。

7 1832年に『独身者たち』の題名のもとで刊行され、後にこの題名を持つことになる。

1830年代前半には大変隆盛を極め⁸、早くも1834年には三層構造の大作を構築することに腐心するようになっていた小説家の新計画に多大な影響を与えていた⁹。

だが作者は、彼においては珍しくないことだが、この作品を休眠状態で放置してしまい、再開するのは1837年の夏になる。この時には作者は以前とは全く異なる条件下に置かれていた。というのも、その間に新聞連載小説としての作品の出版契約を『フィガロ』紙と結んでいたからだ。連載小説は彼自身が前年に『老嬢』で創始した発表形態であり、以後、受容の状況を、つまりは文学生産の状況をも全面的に変化させてしまうものであった。

おそらくこの契約の締結は、ルネ・ギーズが指摘しているようなその後の出版上のトラブルだけでなく¹⁰、小説のテーマ的な再構想化にも大きく関与しているようだ。執筆済の1834年の断片を修正した小説家は作品の所属カテゴリーを変更し、連載小説としての出版に不向きな『哲学研究』から、次第に拡大しつつあった読者層をより引き付ける『パリ生活情景』へと移しているのである¹¹。

かくしてこの作品において哲学的側面は大きく影をひそめ、その代わりに香水商の職業生活と私生活、さらには首都の金融界の内幕が幅広く描かれていく。こうした傾向はバルザックが『フィガロ』の財政的破綻から作品の連載発表計画を断念した後も続く。作品は裏取引の後に出版者ブレによって刊行されることになる。

こうして『セザール・ピロトー』は読者の新たな期待の地平を介して方向性の変化をこうむったのであった。しかしながら、作品の生成は執筆過程、つまりこの作家において読解＝創造として特徴づけられる過程そのものにおいても、というか特にそこにおいてこそ活性化していったことに注目する必要がある。

生成のダイナミズムの源泉としての作者の再読

一編の作品を執筆することは、いかなる作家にとっても一連の想像、解釈、再創造の行為にはかならない。頭の中での着想の強度がいかなるものであるとしても、創造の中で決定的瞬間となるのは書記的媒体への移行である。その時から、書き手は執筆することと同じくらい、あるいはそれ以上に心血を注いで自作のテキストの再読行為への没頭を繰り返すことになる。この書き手＝読み手が物質的な支持体に寄せるまなざしによって、当初想像していた内容や書記化した要素が全て試練にかけられ、選別され、置換され、増大化され、つまりは再構築され、より一層の美学的強度を伴って支持体の上に物語の流れを紡ぎ、また紡ぎなおしていくのである。

バルザックは自身の制作作業の構成を最適化することによって、この再活性化の力を最大限に利用している。まず草稿の半分程度を執筆し、執筆済の箇所を断片的に校正刷りで修正、固定化していくとともに草稿の続きをこれもまた断片的に進めていく。校正刷りの最終ページを校了するまでこうした制作が続けられていくのである。このように彼の作品修正のシステムはそのダイナミズムを再読によるテキストの差異化に立脚させているといえる¹²。

この制作方法では次々にテキストの前後の部分を行き来しつつ修正を行うことになるので、いかに記憶力

8 最終的に『哲学研究』に属することになる作品の大半はこの時期に書かれたものである。

9 S. Vachon, *Les Travaux et les jours d'Honoré de Balzac*, op. cit., p. 22 sqq.

10 *Pl.*, t. VI, pp. 1125–1127.

11 自身でも論説的なテキスト（例えば「Lettre adressée aux écrivains français du XIX^e siècle», *Œuvres diverses*, t. II, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1996, pp. 1235–1253）で述べているように、経済市場と大衆的読者への直面という形でメセナからの自立を勝ち得たバルザックのような近代作家においては、出版市場に対する感覚は極めて鋭敏であることを思い出しておく必要がある。

12 これについては次の拙著を参照のこと：*La Stratégie de la composition chez Balzac. Essai d'étude génétique d'Un grand homme de province* à Paris, Tokyo, Surugadai-shuppansha, 2006.

のすぐれていたバルザックといえども、一気呵成に進めていかなければ再読による刺激効果が十全に得られないことになる。かくして小説家は例の有名なコーヒーを何杯も飲みながら夜中に立て続けに仕事することを自らに課したのであった。ロラン・バルトは「小説の準備」と題されたコレージュ・ド・フランスの講義で作家の制作の時間配分を列挙しているが、バルザックのケースを挙げることを忘れていない——「何としても連続的な仕事時間を確保すること。いかなる断裂からもそれを守ること」¹³。バルザックの仕事の時間配分は根本的にその執筆方法の技術的な効率に由来するものであったことが今日では理解されよう。

『セザール・ピロトー』の物語の二つの箇所は小説家のこうした執筆行為における創作と解釈の相互作用的な関係の特徴的に示しているように思われる。主人公の苦難の物語の前置きとなっている「過去の生活」の長大な描写において、経営する店の二つの主要な商品について彼自身が書いたものとされる広告文が見られる。草稿の段階では、バルザックはそこで広告文に言及しているものの、まだその文章自体は配置していない¹⁴。広告文のテキストを挿入することを決めるのは当該箇所の再校においてである¹⁵。広告文は四度目の校正で次のように題される——「驚異の発見！ フランス学士院認可！ セザール・ピロトーの後宮佳麗クリームと駆風薬用液」¹⁶。広告テキストは校正のたびに推敲され、細部の内容とページ組が調整されていった¹⁷。

おそらくこの断片の挿入は、生成論的にはより重要なもう一つの架空の広告文——フィノがポピノに提案する「セファリック油」の宣伝として現在読まれる広告文¹⁸——の挿入に先立つものであろう。というのも、ピロトーの広告文の挿入はバルザックが草稿をフォリオ37まで書き進めつつ行った校正紙の修正に属するものであるのに対し¹⁹、第二の広告文の導入は草稿のフォリオ87の時点だからだ。

これは「テキスト内テキスト」の波及効果の好例である。というのも、象嵌されたテキストが別の象嵌テキストを招来しているからだ²⁰。だがとりわけ注目すべきは、バルザックが第二の商業テキストの朗読場面のテーマ的・構造的ポテンシャルをすばやく捉えていることだ。一連の修正の対象となる前の草稿のヴァージョンは最終版と大きく異なっているため、転写版をもとにして読み進めて行こう²¹。

ここで既にゴードィサールが恩人の甥であるポピノの広告文を請け負うことになってはいるが、その文章の執筆者はフィノではなく、貧乏な劇作家のダランクールなる人物である。そもそもバルザックが文筆業者の挿話の導入を着想したのは、この箇所の執筆の直前の段階であるようだ。というのも、物語の前の部分で文筆業者への言及が見られるようになるのは再校の段階以降だからである²²。バルザックは書き進めながらこの場面全体の構成を作り上げていき、初登場の人物——ダランクールはバルザックの作品の中で他に登場の機会を持たない²³——を動員したようだ。そして小説家はゴードィサールに彼がポピノを「驚かせようと思った」²⁴と言わせることでこの人物の突然の導入を正当化している。この箇所は後に見るような変更によつ

13 Nathalie Léger (éd.), *La Préparation du roman I et II*, Seuil-IMEC, 2003, p. 319.

14 Lov. A92, f^{os} 22–23.

15 Lov. A93, f^o133v^o (追加紙片付き).

16 Lov. A93, f^o214r^o. 以下、生成資料の引用部では加筆箇所は括弧 < > で表し、削除は抹消線で表す。なお、日本語として訳出不可な些細な抹消箇所などは一部省略した。

17 このテキストの最終版については以下を参照のこと：PL., t. VI, pp. 65–67.

18 同上, pp. 156–157.

19 Cf. « Histoire du texte », PL., t. VI, p. 1127.

20 次の拙論を参照：« Textes dans le texte : jeu et réalisme dans les œuvres de Balzac », Claude Carozzi et Shoichi Sato (dir.), *Histoire. Fiction. Représentation*, Université de Nagoya, 2007, pp. 128–130.

21 Lov. A92, f^{os} 87–89. 本稿末尾の添付資料を参照のこと。原本の文字の配置に忠実な外交版転記法とした。

22 Lov. A96, f^o296v^o (追加紙片付き).

23 Cf. l'« Index des personnages fictifs », PL., t. XII, p. 1362.

24 Lov. A92, f^o87r^o.

て抹消されてしまうが、生成の挙措（事後的な着想）が物語内に書き込まれている現象は興味深い。

広告文そのものに関しては、バルザックが架空の記事や登場人物の長広舌を書く際におなじみの熟達した流暢さで書き上げられている。だが商品名には興味深い揺れ動きが見られる。最終的な「セファリック油」の名称はまだ現れておらず、バルザックはいったん「セザリエヌ油」と名づけようとしたが、これを抹消し、商品名についての登場人物間の議論を導入している——その後のヴァージョンとは異なり、採用されるのはポピノの「セザリーヌ油」という提案である。

この挿話は校正刷りの修正の際に注意深く継続的な再読の対象となり、校了までに6回の校正を経ている。一般的に、バルザックは特に最初の再読修正の際にテキストの大きな改変をもたらす傾向がある。この作家独自の方法である、草稿から印刷媒体への早期の移行によって、小説の諸要素がまだ不安定で変更の余地が大きい段階でテキストに全く新しい可視性が与えられるからである。

事実、この場面の初校はこうしたメカニズムを完璧に例示するものである。ジャーナリストの人物の変更が挿話の再編成と他の作品との相互干渉を引き起こしているのだ。

まず最初の校正刷りで挿話の大部分が書き直され、これによってフィノが登場するようになる。実際、校正紙の抹消された箇所にはグラランクールからフィノへと人物の変更を行った第一段階の修正の痕跡が見出され、復元すると次のようになる。

入りたまえ、〔~~グラランクール~~〕 <フィノ>。ポピノさんを紹介しよう。前に話した若者で、成功すれば感謝してもらえるぞ²⁵。

バルザックは局所的なこの変更だけでは満足せず、『才女』（1837年7月）²⁶で創造した登場人物フィノを作中に据えるために、校正刷りの裏面とそこに貼付された紙片にまでおよぶ長大な修正を加えたのである。作家はそこでゴードィサールにフィノをファーストネームで呼ばせることで二人の親密さを強調している——「〔~~フィノ~~が〕才人のアンドッシュが来た！」²⁷。これは物語の前の部分の再校（おそらくこの校正刷りと連動して修正されたのであろう）での加筆と照応する。そこではゴードィサールがポピノに次のように言っている。

では広告は私が引き受けましょう。幼馴染でアンドッシュ・フィノというのがいて、コック通りの帽子屋のせがれなんです、これが文学をやっていて、『クリエ・デ・スペクタクル』で劇評など書いているなかなかの才人なんです²⁸。

事後的に挿入されたこの予告的な一節によって、先に見たゴードィサールの台詞（『『あなたを驚かせようと思ったのです』と名うての出張販売員はポピノに言った』）は不要になり、実際この大幅な書き直しによって抹消されている。

他方、気前のいいゴードィサールはポピノ宅にて質素な食事に甘んじることなく、「こだわって選んだ六本のワインを添えた夕食」²⁹を宅配させているが、これは引越し祝いを盛大にするためであるとともに、広告文を執筆した友人のジャーナリストをねぎらうためでもある。また、広告文の執筆者の存在感はその仔細なポルトレによっても強化されている。彼の出版業者としての如才なさが喚起されていることに注目しよう。

25 Lov. A94, f°44r°.

26 後に『平役人』となる。

27 Lov. A94, f°44v°.

28 Lov. A96, f°296v° (追加紙片付き).

29 Lov. A94, f°44v°.

彼は自分には文学の才能のかけらもないことを認識し始めており、搾取側として文学の世界に踏みとどまって、〔隣人〕才能ある人々を踏み台にし、〔実入りの悪い著作〕実入りの悪い著述などせずに、商売を行おうと考えていた³⁰。

こうしてジャーナリズムのテーマはいまや小説にしっかりと根を下ろし、内的な生成および作品間の生成の面で第一義的な影響をもたらすことになる。まず一方では、如才ないジャーナリストの導入は、製造者、ジャーナリスト、販売員という主要な役割の分業による近代的な商業キャンペーンの様相をポピノの試みに与え、この挿話にアクチュアリティを持たせている。この点について、場面の一連の重要な修正を指摘しておこう。

せっかちなゴーディサルは原稿を手に取り、大声で仰々しく読み上げた。「〔セザリエヌ〕 <セファリック>油！」
 「カエサルには頭髪はなかったが、この油を使わなかったからだと言ひ張ればいいでしょう」とダランクール。
 「『セザリーヌ油』のほうがいいのですが」
 「〔彼の言うとおりで〕 <いいですか>」とゴーディサル。「〔その方が葉屋らしいし〕 <田舎の人のことをご存知ないですな>、<この名称を持った>外科手術がある。〔田舎の〕連中は馬鹿だから〔混同してしまつて〕、<この油が>お産を楽にするためのものだと思いかねない。<そこから髪の話に戻すのは一苦勞ですよ。>では見てみましょう」。<「自分の言葉を弁護するわけじゃありませんが、『セファリック油』とは頭髪用の油という意味で、あなたのお考えを要約したものです」と書き手は言った。>³¹

見られるように、ダランクールがポピノに譲歩する草稿のヴァージョンとは異なり、出張販売員の合意を得ながら自らの提案を逆言法を使って擁護するジャーナリストの発案によって商品は最終的に「セファリック油」と名づけられている。

バルザックはその次の校正の際にポピノの台詞を改変し、この若い商人が「セザリーヌ油」ではなく、「セザリエヌ油」と名づけたがるようにしており、ゴーディサルの外科手術、すなわち帝王切開（セザリエヌ）へのほのめかしにいつそう合致する構成となった³²。この修正によって朗読の場面の内容はほぼ固定化される。作者はその後校正のたびに広告文の文体的な修正とページ組の調整に専心し、広告文はメダルの挿入によって今日知られているように目だつた外観をまとうことになる³³。

他方、『セザール・ピロトー』のテキストはこの時期のバルザックの複数の小説において展開している文壇とマスコミの描写にも大きく寄与していく。このテーマの出現は1837年の『幻滅』（三部作の現在の第一部に相当）の序文において確認されるが³⁴、バルザックは同作品の第二部（1839年6月に刊行された『パリにおける田舎の偉人』）を待つことなく、これを自身の小説世界に取り込んだのである。この点で重要なのがフィノであり、『才女』では端役に過ぎなかった彼の人物像は『セザール・ピロトー』、『ニュシゲン銀行』、

30 同上。

31 Lov. A94, f°44r. 元のテキストは校正刷りに印刷されていたヴァージョンである。

32 Lov. A97, f°126v°.

33 本稿では紙数の都合から論じることができないが、このプロセスについては今後、「テキスト内テキスト」の観点から仔細に検証したい。

34 「〔作者は〕突如として今世紀の大いなる禍根であり、多くの人々や多くの素晴らしい思想を食いつくし、地方生活のささやかな良心におどましい反応を引き起こすジャーナリズムに思い至つたのである」(Pl, t. V, p. 111)。

『しびれえい』³⁵で順次確立されていき、ブロンデやリュシアン・ド・リュバンプレに対する狡猾な搾取者となっていく。これについて後者の二作品のケースを指摘しておこう。

アンドッシュ・フィノは元新聞記者であるが、自分の役に立つ人間の前では敢えて卑屈な態度を取り、もう必要なくなった人間に対しては倣岸に打って出るこすっからさを持っていた。彼はグスタフのバレエに出てくるグロテスクな人物に似て、前から見ると侯爵、後ろから見ると平民であった³⁶。

アンドッシュ・フィノはリュシアンが無報酬で働いていた新聞の事業主で、それはブロンデの協力と、助言の賢明さと見識の深さのために儲かっていた³⁷。

これらはしたがって作者が『パリにおける田舎の偉人』でこの人物により中心的な役割を与える以前に執筆されたパッセージである。かくして『セザール・ピロトー』はこの人物の搾取者としての経歴を予告し、戦略的なつながりの役割を果たすことになる。第一部の刊行後、第二部の出版までに二年以上を要した『幻滅』の作品計画は、その間、描き出すべきパリのジャーナリズムの登場人物群を準備した他の作品との相互干渉を経ることで、この虚飾に満ちたメディアの世界を大々的に表象するに至ったのだ。

こうして、総体的にはその後の『人間喜劇』へと向かいつつも、『セザール・ピロトー』はそれ自体予期せぬ変容をこうむるとともに、この重要な時期におけるバルザックの他の作品との複雑な生成的影響関係を築くことになったのである。

結論にかえて

バルザックの作品生成の独自性は、創作者と受容者の間を行き交う多数の美学的反応の効果を内包していることにある。テキストの発信と受信の行為は相互作用的であり、また書き手におけるテキスト化と再読・修正の努力は、集中的な制作過程において互いに刺激を与え合っている。

テキスト（あるいはテキストの計画）の解釈と再解釈の潜在性が文学作品の生成のダイナミズムの根幹であるとするならば、バルザックが執筆と読解を行き来するこの運動のありとあらゆる可能性を意識的に活用し、不調和や未完の危険を冒してさえ自作にさらなる強度を与えていったことが理解されよう。

35 1837年秋以降、『セザール・ピロトー』の制作は『ニュシゲン銀行』と並行して行われていた。『ニュシゲン銀行』とともに刊行された『しびれえい』のテキストはこれらの二作品より後に執筆された（cf. Jean Pommier, *L'Invention et l'écriture dans La Torpille d'Honoré de Balzac*, Droz / Minard, Genève / Paris, 1957, ch. I）。

36 *La Maison Nucingen. Fragments des études de mœurs au XIX^e siècle. La Femme supérieure, La Maison Nucingen, La Torpille*, Werdet, 1838, t. II, pp. 195–196.

37 *La Torpille. Ibid.*, p. 363.

資料

1 86 vous ai ménagé une surprise, dit l'...../illustre voya-
 2 geur à Popinot, et tout-à-l'heure vous allez
 3 voir venir un homme de lettres, ~~ehargé du-~~
 4 qui a l'entreprise des devises du Fidèle
 5 Berger, un homme charmant, rempli d'esprit,
 6 plein d'instruction, qui a un vaudeville
 7 reçu à la Gaîté, et qui vous apporte... [- Quoi,
 8 dit Popinot. [- Votre prospectus, mon ami,
 9 un prospectus que nous avons médité. Aussi,
 10 ai-je lâché le bol de punch, les marrons,
 11 les gâteaux, pour lui payer reconnaître sa
 12 complaisance. [En effet, M. des coups de
 13 marteau réitérés annoncèrent les... les
 14 ~~eb~~/divers objets de consommation, et quelque
 15 temps après, la... l'arrivée de... d'un pauvre
 16 auteur, âgé en cheveux grisonnants, âgé de trente
 17 ans, et costumé comme ~~ee~~lui de un poète
 18 de libretti. [- Entrez, mon cher, d'Harancourt,
 19 je vous présente M. Popinot, ~~un~~le jeune homme
 20 de qui je vous ai parlé et qui sera reconnais-
 21 sant en cas de succès. L/[- J'ai/Monsieur, dit
 22 d'Harancourt en se déridant à l'aspect des/u
 23 ~~petit~~ verre de punch que lui présente Gaudis-
 24 sart, j'ai tâché d'y contribuer de mon mieux.
 25 [- Lisons, dit Popinot. [L'impatient
 26 Gaudissart lut/prit le manuscrit et lut
 27 -/à haute voix avec emphase : huile césarie
 28 nne.
 29 Huile Césarienne
 30 [- César n'avait pas de cheveux, mais on peut
 31 prétendre qu'2/e s'il-av c'est faute d'avoir
 32 usé de notre huile, dit d'Harancourt.
 33 [- j'aimerais mieux huile Césarine.
 34 [- il a raison, dit Gaudissard, c'est plus
 35 droguiste, et il y a une opération chirurgicale.
 36 ils sont si bêtes en province, ils confondraient
 37 et croiraient que c'est pour faciliter les accou-
 38 chements. – Voyons !
 39 Huile Césarine
 40 Aucun cosmétique ne peut sans danger

1 87 faire croître les cheveux, ~~mais~~ ni les teindre,
 2 ~~mais~~ la science a déclaré récemment que
 3 les cheveux étaient une substance ~~morte~~ morte,
 4 et que pour les empêcher ~~d'~~soit de tomber
 5 soit de blanchir, pour prévenir la xéra-
 6 sie et la calvitie, il suffisait de ~~d'~~préser-
 7 ver les bulbes d'où ils sortent de tout/e
 8 extérieur pour influ-
 9 ence extérieure, ~~-/~~atmosphérique, et
 10 de maintenir à la tête s/la chaleur
 11 habituelle qui lui est propre. L'huile
 12 Césarine a été inventée pour obtenir
 13 le résultat auquel se tenaient les anciens
 14 Romains, les Grecs et les nations antiques
 15 ~~les plus fortes~~ ... auxquelles leur/a chevelure
 16 était précieuse, et il est prouvé par
 17 des recherches savantes que les
 18 Rois des premiers temps de la monarchie et
 nobles
 19 les n'employ qui se distinguaient par la
 20 longueur de leurs cheveux, n'employaient
 21 pas d'autre moyen.
 22 Conserver au lieu de stimuler, ~~préserver~~
 23 tel est donc la destination
 24 de l'huile Césarine pour laquelle l'inventeur
 25 a pris un brevet d'invention et de perfec-
 26 tionnement. En effet, cette huile ~~m'~~enlève
 27 les pellicules du cuir chevelu, nettoye la
 28 tête, et par les substances dont elle est
 29 composée et dans lesquelles entre comme prin-
 30 cipal élément l'essence de noisette, elle
 31 empêche toute action de l'air extérieur
 32 sur la tête, elle prévient ainsi les
 33 rhumes, ~~-/le~~ coriza, et toutes les affections
 à la
 34 douloureuses de la tête qu'elle laisse sa
 35 température intérieure, sans secousses.
 36 De cette manière les-s les bulbes ~~de~~

1 88 qui contiennent les liqueurs génératrices des
2 cheveux ne sont jamais saisies, ~~et~~/ni par
3 le froid, ni par le chaud, et la chevelure,
4 ce produit magnifique à laquelle hommes
5 et femmes attachent tant de prix
6 conserve jusque dans l'âge ~~et~~/avancé de
7 la personne qui se sert de l'huile césarine,
8 ce brillant, cette finesse, ce lustre, cette
9 couleur qui rendent si charmants/es les
légère
10 ~~chev~~ têtes des enfans. Elle exhale une ~~et~~...
11 odeur aromatique.
12 Manière de se servir de l'huile
13 Césarine
14 Il est tout-à-fait inutile d'~~et~~.../oindre les
15 cheveux, c'est un préjugé ridicule ~~et~~...
16 et une habitude gênante en ce sens que
17 la tête laisse partout sa trace. Il suffit
18 + petite tous les matins de tremper une + éponge
19 fine dans l'huile, de se faire écarter les
20 cheveux avec le peigne et d'imbiber
21 l'~~et~~... les ~~et~~... cheveux à leur racine
22 de raie en raie, ~~et~~... de manière à ce
23 que la peau ~~soit~~ reçoive une légère cou-
24 che, après avoir préalablement nettoyé
25 o portant une la tête avec la brosse: et le peigne.
26 marque distinctive Cette huile ~~est~~... qui se vend par
27 et du prix flacon o de trois francs ~~et~~.../l'inventeur ⊥
28 ⊥ A Popinot rue des Cinq Diamans, quartier des lombards,
29 à Paris.
30 On est ~~pr~~/prié d'écrire franco.
de la ~~et~~/droguerie
31 Nota ~~et~~/A. Popinot tient également les huiles ~~de~~...
32 comme huile d'amande douce, huile de cacao, huile
33 ~~des~~..., huile ~~de~~ de café, de ricin, et autres.
34 [- Mon cher ami, dit l'illustre Gaudissart, c'est
35 beau, très beau, ~~et~~... ~~et~~... parfaitement
36 écrit, et ça ne tortille pas, ça va droit
37 au fait !.. [- le beau prospectus ! dit le
38 petit Popinot enthousiasmé... Nous ⊥ [- un

質疑応答

ステファンヌ・ヴァッション 素晴らしいご発表でした。ただ、「不調和」と「未完」という最後の二つの言葉がやや気になりました。というのも、バルザックの創作における『才女』と『パリにおける田舎の偉人』の連続性が論じられていたからです。これは「不調和」や「未完」といったものではなく、人物再登場によって作品生成に連続性が保たれているということだと思のです。第二点めは、再読修正の問題です。何度目の校正のこれこれの箇所とその前のパッセージの何度目の修正箇所が一致するといったことを指摘されましたが、ここでもまた、再読のこと以前に、1837年に『セザール・ピロトー』を執筆していたときのバルザックの頭の中には既に7月から12月にかけて制作した『才女』やこの年の2月に刊行した『幻滅』第一部の記憶があり、連続性があったわけですね。何年にもわたる非常に長いスパンでの制作上の連続性があるのではないのでしょうか。

鎌田隆行 連続性というのはその通りですが、こうした再活性化は多くの葛藤や当初の計画の変更を伴わずにはいないのもまた確かです。私はそのことを指摘したかったのです。

第二の点に関しては、連続性における再読修正の役割ということが言えます。再読行為においてバルザックの当初のアイデアが変わり、最初は考えてもいなかった効果につながっていくということです。連続性とダイナミズムということなのではないのでしょうか。

松澤和宏 いまの発表で提示された内容については、ガダマーの言う解釈学的循環を参考にできます。バルザックにとって、『人間喜劇』の総体なるものは、常に逃れ去って行くものでありながらも、生成的地平における探求の対象です。ある作品から別の作品への連続性は、同時に部分と全体とを行き来する解釈のレベルの問題で、様々な点でガダマー以降の解釈学のプロブレマティック

に一致する問題です。

鎌田 まさにその通りで、書き上げていくべき作品という地平と制作のプロセスによる実際の変容の間の揺らぎこそ本質的な問題で、ガダマーの解釈学的循環という観点から捉えなおすべきことなのでしょう。ご指摘ありがとうございました。

エリック・ル＝カルヴェーズ 『パリにおける田舎の偉人』についてのあなたの素晴らしい著作を読ませてもらったものの、バルザックの作品生成過程についてはあまり詳しくないのですが、これらの場面の変容に関して、登場人物名などの変容がジャーナリズムというテーマを拡大したのでしょうか？あるいは逆にジャーナリズムというテーマを導入することが登場人物の名前の変更をもたらしていったのでしょうか？

鎌田 難しい問題ですが、その両方ですね。

ル＝カルヴェーズ いや、そのどちらなのかとお尋ねしているのです（笑）。

鎌田 一方であると同時に他方でもあるのです。少なくとも、この人物フィノとともにジャーナリズムのテーマが『セザール・ピロトー』に導入されていったのは確かです。

ヴァッション 再び発言させていただきますが、いまの質問から、この例の重要性が再確認できます。1837年の一連の作品に出てくるこの再登場人物を、我々は社会的な流動性において目にするようになります。彼がジャーナリストになるのをあきらめて搾取者となり、新聞の編集長となるという先ほどの引用は大変重要で、我々は、19世紀初頭の社会的流動性、野心の底知れない拡大、新興勢力の社会的台頭という対象に対して人物再登場という表現手段を持つバルザックの作品のはかりしれないポテンシャルの核心部分に触れているのです。

鎌田 新聞業界の描写がこの人物によって新たな射程を獲得しているということで、ご指摘ありがとうございました。